『世阿弥能楽論書における観客』要旨

室町初期の能役者・能作者である世阿弥の著した能楽論書における、観客の位置づけを確認する。能楽論書中で、観客は対になる二つのグループに弁別されて論じられている部分がある。社会的身分の差異からの“貴人と一般の見物衆”、場所の違いから“遠国・田舎と都の観客”、批判力の違いから“目利と目利かず”などである。世阿弥は、それぞれをどのように捉えていたのか、またこのような弁別は、観客の一部を特に重く扱うべきだという考えにつながっているか否かについて、また、世阿弥の考える演能の成功と観客との関係について考察した。

能楽論書の記述に基づくと以下のように考えられる。世阿弥は演じる場所によって、つまりその場所に暮らす観客の好むものはそれぞれ違うと捉え、「遠国・田舎」の観客は、演者の品や格が上がった芸を理解しがたい、賞賛することは少ないものと考えており、それに対して、「都」の観客は能の批判力が高く、演者の修行の上で芸が停滞するという事態を防いでくれる存在と考えていた。しかし、都の観客の賞讃を得られる芸を磨く事のみに拘泥してはならず、多彩な芸を身につけて時や場所に合わせて臨機応変に対応できる演者が求められる。「目利」とは、「まことの花」をもつ演者であるかどうかを見分けること、「妙所」の面影を初心の演者に見出すことができるなど、たとえ成功しなかった舞台にあっても役者の実力を評価できる観客ということであるが、それは必ずしも能を知り尽くしている観客ということではない。目利の鑑賞眼にかなうことを目指すと同様に、目利かずの観客を満足させる工夫が必要である。社会的身分の高い「貴人」という観客は、演者の意図に沿わないふるまいや要求をし、演者はそれに逆らうことはできない。また彼らが一般の見物衆と同座する場合には、その心を大きく左右する存在でもある。しかしその視線は貴人だけでなく、彼らに影響をうける他の観客達にも向けられており、時には優先しなければならない貴人たちに配慮することを通じて、一座を意図した流れに合わせようとする。「貴人と見物衆」「遠国・田舎と都の観客」「目利と目利かず」のどの場合にも、あくまで観客全員に等しく感動をもたらすことを理想としており、現実とのすり合わせに腐心している。

それは世阿弥の考える観客の感動が、どのような個人の集団であっても、その場の要素が全て渾然一体となることで引き起こされると考えていたからである。一部の個人がどれほど満足を得られたと感じようとも、それはその個人にとっても、最も深い感動が得られたのではない。世阿弥は、その会場の全ての観客の心が演者のふるまいと和合し、個人がしみじみと他の観客と同じ感動を共有しているという一体感を得られることが、演能の成功に欠くべきでない要素の一つと考えていた。